



# ドクター板東の メディカルリサーチ

Vol. 62

～ピアノから 音楽交流 台北で～

<http://hb8.seikyou.ne.jp/home/pianomed/>

筆者は内科医で、ピアニストである。今まで医学と音楽の境界領域でいろいろな仕事に従事してきた。平成22年から23年にかけて、ちょうどピアノに関するエピソードが続くことに。今回は最近のニュースについて記してみたい。

## ピアノコンクール

私はときにピアノ学習者となる。というのは、常はほとんどピアノに触るのが難しいからだ。このままで技術も感性も次第に衰退してしまう。そのため、数

年に一度はピアノコンクールという目標を設定し、しばらくの間、練習するというワケである。

ちょうど昨年は、2個のピアノコンクールにエントリーし研鑽を深めた。

一つは、ピティナ（PTNA）という大規模な大会。NA）という大規模な大会。約4万人が参加する世界最大のピアノコンペである。社）全日本ピアノ指導者協会が主宰しており、地方予選→西日本本選→全国決勝大会へと、駒を進めること

## PTNA コンペティション

The Piano Teachers' National Association of Japan, Incorporated by the Japanese Government

地区予選  
→ 地区本選6か所  
→ 全国決勝大会



図1

他方は、国際派ピアニストの杉谷昭子氏が主宰されている第1回ヨーロッパ国際ピアノコンクール（EIPC）である。名古屋予選→同本選→全国決勝へと通過し、ファイナリストとなつた。運よく良い経験をさせて頂いたと思う。

今回のトレーニングで、自分なりにレベルが上がつたと自覚したことがある。具体的には、微妙な指のタッチで出した音を聴き、瞬時にタッチを変えるテクニックだ。いつもできるワケではないが、このような微細な神経回路が私の身体に少しずつ誕生しつつある。



図2

## 音楽で国際交流

その際、今回のプロジェクトに関して、日野原先生から御紹介下さり、不思議なタイミングながら、すべての関係者のスケジュールがうまく調節できることに。その結果、音楽や音楽療法の仲間7名が、音楽交流のために台湾を訪れることがなった。



図3

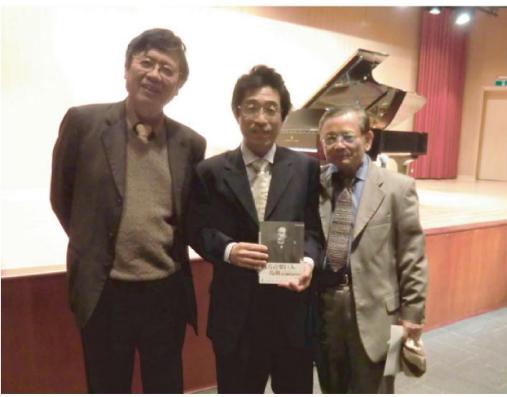


図3



図4

## 西方音樂巨人 馬勒

Gustav Mahler 1860-1911  
馬勒150周年紀念特輯

林衡哲著

呂詒嘉・簡文彬・江漢聲・黃均人・侯平文・鄭重推薦

建春風雲紀事刊20

ピアニストであり、同大学のオーケストラをバックにピアノ協奏曲のCDもリリースしている（図5）。

また、医師で文化人として著名な林衡哲（Jer-Shung Lin, MD）先生も駆けつけた（図4）。林先生は台湾で「醫生兼文化評論家」として知られ、出版社・希望春風文化事業股份有限公司を設立。今までに500冊以上に及ぶ作曲家マーラーの評伝の書籍「西方音樂巨人 Mahler 1860-1911 renaissance」を完成させた（図6）。サイン入りの本書を私が預かり、日野原先生にお渡しすることになった。

まさに音楽と医学の香

り漂う大学である。同大学の外来棟には、スタインウェイのグランドを擁する大酒店まで設置されており、ここで交流コンサートが行われた（図7）。

今回、ライフワークとして3年間を費やし、500冊以上の本を編集したり、台湾出身の作曲家や演奏家のCDをまとめたり、芸術文化の発展に大きく寄与してもらっている。

今回、ライフワークとして3年間を費やし、500冊以上の本を編集したり、台湾出身の作曲家や演奏家のCDをまとめたり、芸術文化の発展に大きく寄与してもらっている。



図5



図6

引き続いて、私は1時間の講演「The Power of Music Therapy」を担当させていただこうことに（図8）。本レクチャーには、ポスターや巨大な垂幕、キーボード、通訳の手配など、最大限の御高配を賜り、ここに感謝したい。誰もが御理解いただけるよう、説明は英語と日本語で行い、スライドは中国語を加え3カ国語で併記した。

これが可能となつたのはインターネットのグーグルを活用できたから。中国語

専門の小学校として知られる福星（Fuxing）國民小学校で、音楽交流コンサートを行った。

## 音樂療法セッション

翌日6日は台北でも音楽専門の小学校として知られる福星（Fuxing）國民小学校で、音楽交流コンサートを行つた。

さらに、7日は、日本人の高齢者が集つ「玉蘭莊（台北市松年福祉会、Taipei Gyokulan Care Center）」で音楽療法セッションを行つた（図9）。担当者は聖口力看護大学出身の今井文子様。様々な企画や運営が素晴らしい。80～97歳の方々が澆刺と文化講座を受講し議論している姿には驚いた。今回の音楽交流で「音楽に国境なし」という格言を再認識した次第である。



図8



図9

（板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアニスト）